### Shumei International





〒529-1814 滋賀県甲賀市信楽町田代353-1 TEL:0748-82-3140 FAX:0748-82-3143 E-mail:info@nposhumei.or.jp http://www.nposhumei.or.jp





2018年2月10日発行



Shumei International is dedicated to improving the human community by restoring the environment, fostering a deep appreciation of beauty and the arts and cultivating leadership among the next generation.

The organization was founded on the philosophy of Mokichi Okada, who taught that cultivating respect for nature and appreciation of the inherent beauty in the natural world will uplift human society and enable a truly balanced and sustainable world. Shumei International has established programs around the world with a focus on Natural Agriculture.

Shumei International

## **NEWSLETTER**

Vol.17



【表紙】 ザンビアで毎年開催されている自然農法ショー にて。各地区からさまざまな作物を持ち寄った。 国連のSDGs (持続可能な開発目標)のロゴを



秀明インターナショナルは、1.国際協力 2.環境問題への取り組み 3.優れた芸術による人心の向上の3点を基本的なプログラムとして実践します。この実践により、個々の人間性、精神性の向上を促し、社会へ新しい人生観、価値観を提唱したいと考えています。そして、私たちと同様の目的を持つ世界中の人たち、団体と協力しあい、世界平和に貢献していくことを目指しています。



会場となった MIHO MUSEUM(滋賀県甲賀市)

## Special Topics

# 特集 SEED FREEDOM 未来へつなぐ種・土・食 2017 講演会

- 4 SEED FREEDOM 2017 次世代へのメッセージ ~私たちがどのような作物を育て食べるか~ ヴァンダナ・シヴァ博士(ナヴダーニャ財団 代表)
- 10 質疑応答 Q&A
- 14 Shumei海外支援PHOTOレポート
  ザンビア/フィリピン/ブラジル/ネパール/マダガスカル/タンザニア
- 22 ももだにオーガニックマルシェ
- 26 第19回 IFOAM世界会議 基調講演 自然農法から学ぶライフスタイル アリス・カニングハム (秀明インターナショナル 国連担当理事)

## SEED FREEDOM

## 未来へつなぐ種・土・食 2017

「一つの種は生命の源であり、私たちの生命につながっている」のメッセージのもと、生命の種、豊かな土、生命力あふれる食を取り戻すことを目指し、平成 29 年 12 月 2 日・3 日、「SEED FREEDOM 未来へつなぐ種・土・食 2017」を開催いたしました。

4回目となる今回は、開館 20 周年を迎えた滋賀県の MIHO MUSEUM に世界的環境活動家ヴァンダナ・シヴァ博士をお招きし、12月2日はサブタイトルを「次世代へのメッセージ」とし、若者向けに講演していただきました。12月3日はシヴァ博士の他、イタリアンシェフ奥田政行氏、MIHO MUSEUM の熊倉功夫館長を交え、「美しい食を求めて」のサブタイトルのもと、講演会が開催されました。(3日の講演については、後日、別誌にて発行予定)

両日ともに大勢の方が来場され、共に学び、考える機会を得られた意義ある講演会となりました。

主催 NPO法人 秀明インターナショナル MIHO MUSEUM

### SEED FREEDOM 2017

# 次世代へのメッセージ

~私たちがどのような作物を育て食べるか~

2017年12月2日 MIHO MUSEUM 南レクチャーホール



### ヴァンダナ・シヴァ博士

Dr. Vandana Shiva

ナヴダーニャ財団 代表

インド・デラドゥーン生まれ。カナダのウエスタン・オンタリ 才大学で物理学及び科学哲学の博士号を取得。1987年、 生物多様性や種子の保全、有機農業を推進する団体ナヴダー ニャ (Navdanya) を設立。自然を慈しみ、生命の尊厳を 守る活動を展開し、貧しい人々や女性の視点に立って、開発 やグローバリゼーションのもたらす矛盾を鋭く指摘。世界 の農民や環境活動家たちに大きな影響を与えている。

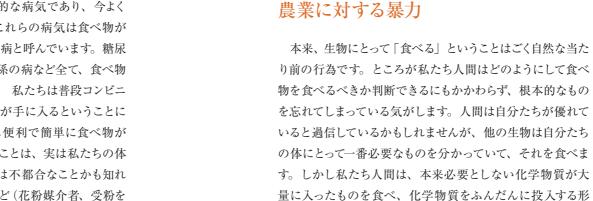
### 利便性の代償

"私たちがどのように作物を育て、食べるか" ――それが、 私たちの生き方を将来に遺すことであり、私はそのために 40年間活動してきました。多くの科学者が「今のままの生活 を維持すれば、多くの生物が絶滅していったように私たち人 間も100年後には絶滅してしまう|と警鐘を鳴らしています。 大量の化学物質投入、化石燃料使用と遠距離輸送を軸と する産業型農業によって地球上の75%の土壌と水が汚染さ れ、90%の生物種が絶滅に追い込まれました。

Shumeiとは2009年、コペンハーゲンの国連会議(COP15) で "SOIL NOT OIL (石油ではなく土を大切にしよう)" と いうテーマでワークショップを行いました。当時から、温室 効果ガス(二酸化炭素など)による気候変動に関しても、 産業型農業による汚染が占める割合は50%とも言われてい ました。そのうち二酸化炭素の300倍もの悪影響を及ぼす 二酸化窒素は化学肥料が原因です。また、メタンガスの多 くは工場型農業と食物廃棄が原因です。このような産業型 農業、産業的な世の中のシステムがどれだけ私たちに危機 を与えているかということに気が付かなければなりません。

同じように今、大量に使用されている化学物質は、環境 だけでなく私たちの体、健康をも脅かしています。病気の

75%は伝染する病気ではなく慢性的な病気であり、今よく 言われる生活習慣病です。そしてこれらの病気は食べ物が 原因と言われています。私は食生活病と呼んでいます。糖尿 病、高血圧、心血管疾患、神経関係の病など全て、食べ物 によって引き起こされているのです。 私たちは普段コンビニ エンスストアに行って大変便利に物が手に入るということに 慣れているかもしれません。しかし便利で簡単に食べ物が 手に入って都合がいいと思っていることは、実は私たちの体 にとって、また社会や環境にとっては不都合なことかも知れ ません。受粉を担うハチやチョウなど(花粉媒介者、受粉を 助ける虫)に不都合をもたらした結果、食物の生産に大きな 悪影響を及ぼしています。一方で私たちは未曽有の天災とい うものも体験しています。台風や洪水など、以前では考えら れなかったような地球規模の被害が増えていることも全ては このような都合のいい便利だというものを追求した結果では ないでしょうか? アメリカのアル・ゴア元副大統領が書いた "不都合な真実"という本をご存じだと思います。私たちが 便利さだけを追求することが、地球だけではなく私たちの 体にも不都合な状況を招いているのです。

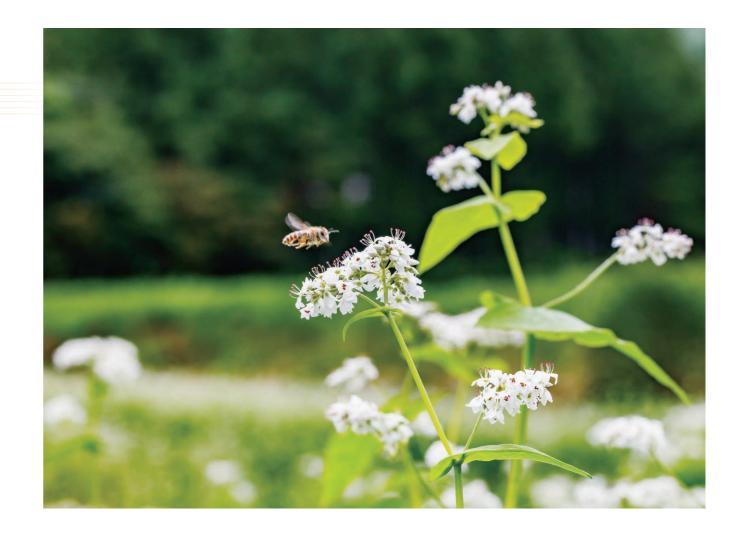


もともと化学肥料というものは、戦争で使用される爆薬を 作る企業によって作られました。化石燃料を原料として窒素 界大戦中にドイツがユダヤ人収容所で人を殺すために使用し

た毒ガスが基になっています。そしてこの農薬によって何も 害を与えない多くの昆虫の75%が既に絶滅しています。

1984年には、インドのボパールでの悲劇がありました。 農薬工場が爆発したことにより農薬がボパールの町に大量 に流れ出て、それによってたくさんの方が亡くなりました。 これは30年以上前のことですが、いまだに多くの奇形児が 生まれています。これは決して不測の出来事ではありません。 そして農薬と同じように何げなく使っている除草剤。この除 草剤はベトナム戦争時代に使用された枯葉剤と同じ成分で す。このように体に害を与える化学肥料、農薬、除草剤が、 今私たちが食べている作物に使われているわけです。

環境に優しい農業をしていれば、生物多様性が保たれ、 多くの虫が生息していても害虫は生まれてきません。なぜな らば多様な生物が暮らす生態系では、土壌の中の微生物の バランスが取れ、その調和が取れた中では害虫というもの は生まれないからです。調和が取れた生態系では、多くの 山菜など自然の恵みが豊富に得られます。インドのある圃場 では250種類の野生の草(食用)が確認されました。とこ ろがそこに農薬や除草剤を大量に入れ、単一栽培を推進す ることによって豊かな自然を失い、逆に雑草や害虫が増える という状況を起こしています。



### 農業に対する暴力

の農業を推准しているのです。

肥料は作られます。しかし窒素は豆類を育てることで容易に 作られます。本来窒素というものは、微生物によって土壌中 に必要なだけ存在するはずです。しかし、それを爆薬のよ うな人を殺すものと同じ方法で作り、それを作物に与えると いうことをしているわけです。化学肥料の流出によって、デッ ドゾーンという海の中に生物が生息できない場所が発生し、 土壌の汚染など多くの弊害が起こっています。また害虫を駆 除しようと農薬を大量に使用していますが、これも第二次世



BT コットンに農薬を散布するインドの農家

### 遺伝子組み換え作物の脅威

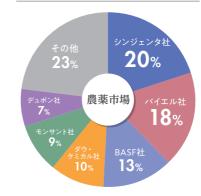
よく聞かれる「遺伝子組み換え技術」。これはもともと科 学者が技術として開発したもので、これが倫理的に許され ることか、本当に私たちにとって役に立つか、多くの科学者 はその責任までは考えていません。しかし大企業はこれに目 を付け、遺伝子を組み換えれば自分たちが特許権を持てる、 種をコントロールできると考えるようになりました。20年ほ ど前から、"遺伝子組み換え作物"という言葉を皆さんも聞 くようになったと思います。この遺伝子組み換え作物には大 きく分けて2種類あります。一つはBT(土壌微生物:バチ ルス・チューリンゲンシス由来の殺虫作用のあるタンパク質 を植物の細胞に組み込み、作物そのものに殺虫効果がある 状態にする)、もう一つは除草剤耐性の作物です。企業は「こ れらを使用することによって、害虫の被害も、除草の心配も ありません」というのがうたい文句でした。 しかし 20 年たっ た今、除草剤にも負けないスーパー雑草や、どんな農薬にも 耐え得るスーパー害虫が生まれてきました。

1998年にモンサント社がインドに進出し、BT コットンを 持ち込みました。当時「BT コットンを使えば全く農薬は要 らない、害虫は一切付かない」というモンサント社の言葉を 信じて、多くの農家が BT コットンに切り替えました。しかし、 実際には害虫は減ることなく、80%のインドの綿花が被害に遭いました。その結果、より大量の農薬を投入したことで病気となり、病院で苦しむ人たちをたくさん見てきました。遺伝子組み換えの種と農薬を買うためにインドの農家は借金を抱え、それが慢性化して30万人もの自殺者が出ています。

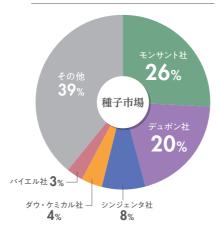
人を殺すという殺人行為には二つの形があると思います。 一つはピストルで殺すような直接的な殺人です。もう一つは 直接には手を加えなくても、人が死ぬであろうという状況を 分かっていながら、それを行うという間接的殺人です。これ は「モンサント社による不正行為であり、多くの農家たちが だまされて被害を受けていることは犯罪に価する」と、私た ちはインドにおいてモンサント社を訴える活動をしています。 彼らは作物の遺伝子を組み換えることで種に対する特許権 を行使しています。あたかも彼らが生物を生み出したかのよ うに唱えているのです。生き物に対して特許を主張するなど もっての外です。私たちは生態系の一部であって、私たちが 他の生物を生み出したのではありません。

モンサント社の除草剤(ラウンドアップ:主成分 グリホサート) 耐性作物の代表格である遺伝子組み換え大豆はアメリカだけではなく、ブラジルやアルゼンチンにも普及しました。本来ラウンドアップを散布すれば、遺伝子組み換え大豆だけが成長し、除草の必要はないはずでした。ところがアル

#### 農薬市場のシェア (2014年)



#### 種子市場のシェア (2014年)



資料: N+1 Swiss Capital AG

ゼンチンではラウンドアップに対して耐性を持つスーパー雑草が発生し、その結果、より多くの除草剤を飛行機から散布しています。それにより、たくさんの子どもが奇形で生まれています。他にもグリホサートが自閉症やアルツハイマー病の増加等、多くの弊害を起こしていると報告されています。また、スリランカでは同じような農薬散布の結果、多くの方が腎臓疾患を起こし、政府がラウンドアップの使用を一切禁止しました。

2015年にはWHO(世界保健機関)が、グリホサートががんを引き起こすという研究結果を発表しています。これによって多くの国々で、このような技術を廃止していこうという動きもあります。しかし、企業は買収や政治的な介入などさまざま方法を使い、例えばヨーロッパで起きたラウンドアップを使わないようにしようという動きを阻止したのです。アメリカでもグリホサートが原因と言われるがん患者が増えています。1,000人を超えるとも言われるこれらのがん患者がモンサント社を訴えるということも起きています。チャンスがあれば、モンサント文書というものを読んでみてください。モンサント社の実態が分かるはずです。彼らは、「グリホサートが人体に悪影響を及ぼす」というようなことを書いた科学者の言葉をねじまげ、圧力をかけ、自分たちに都合のいい文章に書き換えています。彼らは、単にラウンドアップや



© Natacha Pisarenko 2013

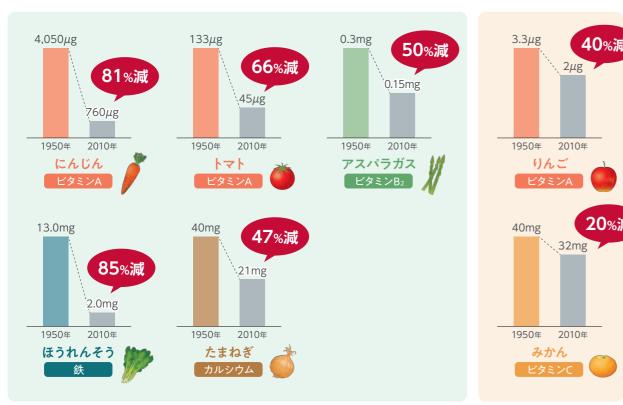
アルゼンチン、チャコ州に住む少女。生まれたときから 全身にある黒い斑点は農薬と関連している可能性がある、 と医師は言う。

遺伝子操作したものを売るだけではなく、私たちの人体に、 私たちの環境に、そして社会に戦争を仕掛けていると言っ ても過言ではありません。

これらの毒を作っている会社は、彼らがねじまげた科学的な根拠をもとに虚偽のうたい文句を使って、私たちに毒を売り、私たちは彼らの言葉を信じてその毒を食べさせられているという現状です。今私たちがしなければいけないのは、何が本当なのか、何が本当の食べ物で、何が正しい食べ物で、どのように作物は作られて、どういう作物を食べるべきなのか、そこに目を向けなければなりません。

もともと戦争中に爆薬などを作っていた大企業6社が、合併して今三つの企業になっています。その企業が私たちの農業を牛耳っていると言っても過言ではありません。モンサント社はバイエル社に買収され、ドイツのシンジェンタ社は中国のケムチャイナ社(石油化学メーカー)と合併、デュポン社はダウ・ケミカル社と合併しています。この三つの巨大企業が世界の種をコントロールし、世界の農業をコントロールしているという状況なのです。

#### 栄養価の比較



※ ビタミンA:1IU=0.3μgで計算

文部科学省 日本食品標準表を元に作図

### 私たちの食の未来

遺伝子組み換え操作というのはある意味で破綻しています。スーパー雑草やスーパー害虫が発生してコントロールがきかない状況になっています。そのためこれらの企業は「遺伝子組み換え」ではなく、次のステージであるクリスパーキャスナインなどを利用した「ゲノム編集」(※)に注目しています。クリスパーとは細菌の遺伝子に繰り返し現れる配列のことです。バクテリアはウィルスに攻撃されるとそのウィルスを少し自分の中に取り込むことによって耐性、免疫を作り、次の攻撃に備えます。私たちがインフルエンザなどのためにワクチンを使用するのと同じ考え方です。もちろん自然界でも起きていることですが、4年ほど前に科学者たちは、これを技術的に、遺伝子を切り取って編集して利用しようと考えたのです。

そしてこの新たな技術で自分たちに必要ない生物を絶滅させることを模索しています。例えばアマランサスという雑穀はビタミンAが豊富なとても良い食べ物です。このアマランサスが除草剤の影響でスーパー雑草化している現状に対して、モンサント社は、ゲノム編集によってアマランサスそのものを死滅させようと考えています。自分たちにとって不都合な作物を死滅させる——私たちにそんな権利があるので

しょうか。これは間違いなくこれらの大企業のおごり以外の何ものでもなく、自分たちが全てをコントロールできると思っている恐ろしい状況です。ゲノム編集で一つ遺伝子を編集すると、1,500種類の病気を引き起こす可能性があると言われています。自然界に新たな問題を起こす可能性が大きいということです。明らかに私たちが進むべき未来ではないはずです。

持続可能な農業をしている土壌の中には何億という微生物がいます。その微生物が作物に栄養素を与えています。それによって、私たちが食べる食物の中には、亜鉛であったり、マグネシウムであったり、いろいろな栄養素が満たされています。それが本来の形です。しかし慣行農業のように化学肥料を投入しているような所では、作物の栄養素がどんどん減ってきています。その結果、本来あるべき栄養素が足りない食べ物が蔓延しているのです。

インドで5000年前から言い伝えられている生きるための科学とも言われる"アーユルヴェーダ"では、「人間は、甘味、酸味、塩味、辛味、苦味、渋味と、バランスがとれたものを食べることが本来の形である」と教えています。それが私たちにとって一番栄養のある食べ物で、ナヴダーニャでも勧めています。日本食もバランスが取れた食であることは間違いありません。



MIHO MUSEUM 熊倉功夫館長監修 レストランメニュー "一汁三菜"

私たちの体は機械ではありません。私たちはたくさんの 細胞によって作られています。特に腸、これは第二の脳と も言われます。腸の働きが健全であることがいかに大事か。 腸内フローラという言葉もありますが、この腸に、たくさん の毒素を入れてしまえば、多大な影響を受けます。 なぜな ら私たちは食べ物によって私たちの体が形成されているから です。この多くの細胞が活性化してはじめて人間として生き ているわけです。ある科学者によると「あと 20 年もすれば、アメリカの子どもは 2 人に 1 人が自閉症になる」という予測 結果もあります。

食の未来を考えたとき、これから私たちが何を食べるか、どういうものが私たちにとって大切な食なのか――遺伝子操作された種からできた作物を食べることはもっての外です。まずその遺伝子操作された種が、世の中から消えなければいけません。種に特許権、作物に特許権などを訴える企業に対して私たちはNOと言わなければいけません。ナヴダーニャで行っている有機農業や、自然農法で作る食べ物には慣行農業のものより、何十倍もの栄養が含まれています。また、自然に栽培された作物からはグルテンアレルギーなどは起きません。産業型農業によって生産された作物からこれらのアレルギーは起こるのです。先日、もらったリンゴを一口かじって捨てたことがありました。なぜなら全く

味が無く農薬の味しかしなかったからです。私たちの食べ物は毒にまみれています。それらを排除して、本当に体のためになる食べ物を食べていく、それが私たちが目指すべき食の未来ではないでしょうか。有機農法や自然農法で栽培された作物には慣行農業の作物の60%以上多くの栄養素が含まれていると言われています。

コンビニエンスというのは「便利、都合がいい」という意味です。そのコンビニで、簡単だといって、毒にまみれた食べ物を買って食べています。そうではなくて、便利でなくても本当に栄養素がたくさん含まれた食べ物を選ばなければいけないのではないのでしょうか。私は今日ここに来ていらっしゃる特に若い人たちに提案したいと思います。日本にコンビニではなく、インコンビニエンスストア、すなわち不都合な便利でないストアを作ってはいかがでしょうか。

(要約)

#### (※) ゲノム編集とは

任意の DNA ゲノム配列を特異的に切断する人工制限酵素を使用することで、特定の場所に変異を誘導する技術。従来の遺伝子組み換えよりもはるかに正確に遺伝子を操作できる。国内でも肉の量が 1.5 倍の鯛、腐りにくいトマトなどの開発が進む。

# 質疑応答



#### どうしたら良い食べ物と悪い食べ物を見極めることが できますか?

もし食べ物を商品として見てしまえば、それが良いか悪いかを見分けるのは非常に難しい。不可能に近いかもしれません。なぜならそれが本当に良い物か、莫大な費用をかけてテストや実験をする必要があるからです。しかし、どのようにしてその食べ物が作られたか、という観点で見れば違ってきます。それが「環境に優しい農業によって作られた、地元の農家で作られた、旬のものである」、そういうことに目を向ければ絞られてきます。今、食べ物は旬や地産地消ということよりも、(特に大量生産されているものは)どれくらいの期間保存できるか、ということに重きが置かれています。しかし、間違いなく"長期間保存できるもの=良い食べ物"ではありません。そこに意識を向けて食べ物を選ぶということが大事ではないでしょうか。

きっと皆さんのおじいさん、おばあさんの世代は、農薬が 大量に使用されたものや、遺伝子操作をされたものを食べ ていなかったと思います。特に長生きで健康なお年寄りの方 はきっときちんとしたものを食べてこられたと思います。で すから、そういう方の知恵を聞くことも大事です。ナヴダー ニャでは、そういった年長者が持っている知識を提供する 大学、学校というものをつくっています。

#### ■ 正しい情報を手に入れる方法は?

今私たちはもう一つの真実とか、別の真実などということ が話題になる時代に生きています。本来、真実というもの は大変複雑です。私たちが住む生態系、私たちの体、そし てこの社会、何一つシンプルなものはありません。細胞一つ とってみても大変複雑です。ところが科学者たちの中にはこ の複雑な構造を持つ生命体を分解し、その一部だけを操作 するようになりました。その結果、他の細胞にどのような影 響を及ぼすかも考えないのです。このような科学者は力学の 還元主義者ともいえるでしょう。全体の情報を得るのではな く、一部の情報だけで全体を理解したかのように誤解して います。そしてこれらの情報を利用した大企業は限りなく簡 素化した情報を自分たちに都合のいいメッセージにすり替え て私たちに届けています。複雑な要素を排除して、一見分 かりやすく、自分たちが言いたいことだけを特化するという 形でメッセージを届け、情報を操作しているのです。そして、 これらの嘘の情報はソーシャルメディアを通して一気に拡散 していきます。皆さんが頼るソーシャルメディアは間違ったり 歪められた情報が拡散する危険が高いです。

科学 (science) の語源はラテン語の scientia (知識) であり、scientia は scio (知る) からきています。インフォメーションを他人からもらうのではなく、自ら知るという行為、そこが大切です。私が皆さんに言えることは「間違っても何か情報が知りたいと思ったときにグーグル検索はしないでください」と。なぜならば、それは誰か (もしかしたら企業)が提供したいと思っているものをそこに表示させているだけかも知れません。大企業は、「君たちは何も知らないだろう、だから我々が全部提供してあげるよ」という社会を作っているわけです。それに多くは欺かれているのです。本来私たちはたくさんの知恵があるにもかかわらず、「そう私たちは知らないから、どこからかこの情報を聞いてこなくては」と。そうではなくて、一番確実で信頼できるのは自分の体験

です。自分で知ろうとする行為が大切です。

私たちの体はとても複雑であり、また素晴らしい能力と知 恵を持っています。私たちは病気になれば、私たちの体が 教えてくれます。変なものを食べたらお腹を壊すのは、腸が これはおかしいと判断するからです。腸にその能力があるわ けです。腸の中のバクテリアも優れた能力を持っています。 なぜなら、人間が発見する前から、自らを守るため免疫を 獲得するというクリスパー技術を持っていたのですから。何 が正しいか、どういう情報が必要なのか、自分で経験して いくことがとても大事です。生命体には素晴らしい知能があ り、適応し進化する力を持っています。単に他人から情報を 得るのではなく、自分で体得した情報を信じ、それらの体 験に基づいた情報を共有する責任があります。例えば作物 についても、自分自身で作物を作っている人に会って、どう やって作物ができているかということを体得すればそれが知 識になります。皆さんにぜひお勧めしたいのは、アパートや マンションに住んでいても、たった一つでいいですから何か 植物を育ててください。それを育てるだけで、生命の複雑 さ、神秘さ、その素晴らしさというものを自分で体得するこ とができるということです。その結果、相互関係や信頼関係、 助け合いの精神の大切さを理解します。

今は、AI(人工知能)とかロボットというものに頼りがち です。日本は特にこれらの分野に力を入れています。ビッグ データも注目されています。でもそれは単に集められた情報 だけであって、そこには知性や知識はありません。それはコ ンピューターによって算出された数字やデータ、情報を並べ ているだけです。コンピューターによって出されたデータに よれば、人為的に行うクリスパー技術(遺伝子操作)は完 壁のはずでした。でも実際には想定外の状況が生まれてい ます。最近、香港で作られたロボットがサウジアラビアで市 民権を得たという話を聞きました。そのロボットの名前はソ フィア、女性らしいのです。サウジアラビアは女性の人権に 制限がある国です。(しかも彼女は以前「人類を滅ぼす」と いう発言もしています。)これがおかしいと思わないというこ とがおかしいのです。今は、このような情報が入ってきても、 何も感じず受け取ってしまうこと自体がやはり問題だと思い ます。自分で理解して体験していく――それが一番正しい情 報、生きた情報を得る近道ではないでしょうか。

現在の大量生産、大量消費、大量廃棄というようなモ ノカルチャー(単一文化)から脱却することはできるで しょうか?

モノカルチャー(単一文化)というのはモノポリー(独占)から来ていると思います。そこから脱却するには、多様性というものに対して感謝し、多様性を求める心が必要です。そして多様性を守るという意識もとても重要です。ですから私は種を守る活動を行なっているのです。種を守る活動が、モノカルチャーを称賛し単一栽培を推進する産業型農業からの脱却につながるからです。種の多様性を守ることで、作物の多様性を守り、多様な食文化を保てます。それは私たちを健康へと導き、地球の健全を保ちます。

このモノカルチャーな考え方は、さきほどからお話している大企業が私たちに見せている幻の社会であり、文化です。 彼らは政府をコントロールし、リサーチをコントロールし、メディアをコントロールして大きくなっています。

また、これらの企業を支援しているのは、多くの銀行や 投資会社などの金融関係、マネーゲームなどを通してここ 20年ほどで急速に成長している団体・企業です。彼らは金 融システムをコントロールして巨額の富を得ているのです。お 金がお金を生むという幻想を作り出しています。それに私た ちも踊らされているのです。しかしそれは一つ間違えれば大 変恐ろしいギャンブルです。よく金融危機という言葉を聞く と思います。あれは数字の上で、株価が下がったとか、そ れによって会社が破綻したとかしか見ません。でも実際はそ れによって家を無くし、土地を無くし、食べる物にも困る、 追い詰められた人がたくさんいるわけです。でもその実態は 見えてこない、数字上のことだけが表面に現れる、そういう 社会になっています。

6年前は世界の富の半分を388人の人が持っていました。それが2年前には62人になり、去年は8人、今年は5人。5人の人が世界の半分の富を持っているのです。どう考えてもおかしいはずです。そんなことはあり得ないはずです。しかし、彼らやその企業は、作られた幻の社会を私たちに信じ込ませることでそれを正当化しています。この大企業は何も生み出してはいないのです。別に種を生産しているわけでもないのです。他人が作った、農家が一生懸命手間をかけて作った種を、遺伝子操作し、勝手に特許権を付けて、特許を侵害したと言ってロイヤリティ(使用料)を取る。それでお金を儲ける。本来、豊かな社会とは人が作る貴重な産

11



ガンディー 塩の行進のモニュメント

物によって人に役立つ、人が幸せを感じられる社会のことですが、そうではなくて、数字上のみで良いように見える社会を築いています。

本当の意味での豊かというのは、お金を持っていることで はなかったはずです。しかし今は、お金を持っていることが 豊かであるとすり替えられてきています。また、新しい遺伝 子組み換え作物やクリスパー技術、AIやロボットなどが未 来を築き、人間は必要なくなるかのようなデジタル社会化を 目指しています。人間が無用などということは絶対にありま せん。今、一番気が付かなければいけないのは、「本当の 豊かさとは何か、そして自分たちにとって大切なものは何か、 自分たちのためになる食べ物を食べ、自分たちのためになる 社会を築き、私たちは大企業が思っているほど愚かではな い」ということです。私たちには素晴らしい才能があるはず です。私たちは作物も作れますし、社会もつくれますし、コミュ ニティだってつくれるわけです。しかしそれをつくっていこう という意識を持たなければ変われません。私たちは今まさに 分岐点にいます。日々の生活で何を選択するか、意識を持っ て行動することこそが、この虚偽の世界をつくっている大企 業の独占から脱却する方法だと思います。

何かをしたいとは思っているし、この社会を変えたいとも思います。種を保存もしたいと思いますが、政府や、法律などで、私たちが変化をもたらすのがとても厳しい、難しい。国、政府、大企業に対して個人として何ができるのでしょうか?

大企業であったり、政府により新しい法律を出されたりしてしまえば、自分たちがそれには対抗できないと思いがちです。しかし私たちが何もできないと思うこと自体が負けであり、まずそれを乗り越えなければなりません。なぜならば、彼らはもう一つの真実のように、私たちに「本来のものでないもの」を提示しているわけです。本来、政治や国は人民のため、民衆のためにあるものですけれども、残念ながら多くの政府や国が企業のために動いているという現実はあると思います。それに対抗するためには、私たちが「本当に大切なもの、何が正しいのか」ということをしっかり理解して、それに対して私たち一人ひとりが立ち上がり、何ができるかを考えていかなければいけないと思います。

マハトマ・ガンディーは、自分の力を信じ、認識し、自分が望む変化を自分自身がまず変わることで起こすことを唱えました。ガンディーの言葉に「サティヤーグラハ(真理の主張)」という言葉があります。インドで「種を採ることを禁ず」



と言われれば、その「種を採るという真実の運動」のもとに 自家採種を積極的に行いました。その事実と、その素晴ら しさを立証していきました。そしてそれを政府に、企業に突 きつけることで逆に政府を押し戻すことをしてきました。ガ ンディーの「塩の行進」というのを聞いたことがあると思い ますけれども、当時塩をイギリス政府に独占されていたイン ドの農民は「塩を生産してはいけない」と言われたとき、ガ ンディーが皆を引き連れて行進をしました。そのようにみん なが一緒になって正しいものに向かって立ち上がるという意 識を持って行動に移せば、相手が政治家であれ、政府であ れ、大企業であれ、必ずそれに打ち勝つことができます。 今私たちが一番しなくてはいけないのは、その彼らの独占と いうものに対する現実と何が私たちにとっては大切なのかと いうことをしっかり見極め、そして本来私たちがあるべき姿 というものはこうなのだということを自分たちの体験を通して 伝えていくことが大事なのです。

本当に清らかな作物を作る重要性が分かっていれば、どういうものが清らかな作物か分かっていれば、それを訴えることができます。でもそれを知らなければ、彼らに対抗して行動を起こすことはできません。私たちの知識は、私たちが体験することによって得ることができます。それによって私たちは地球市民として、地球市民の責任を全うできるのだ

と思います。そういう意味でも、本当の民主主義を私たちが 唱えていけば必ず彼らに立ち向かっていけると思います。

最後に、今私たちが戦っているのは「私たちのこの生命を 守る、正しい食べ物を守る」という、そういう戦いです。生 命に対する容赦ない攻撃を受けている今こそ生命をたたえ、 生命の素晴らしさを体感するべきです。ですから革命のよう な戦いではなく、豊かな生活を送り、清らかな食べ物を食 べて、幸せに過ごし、そしてみんなで平和に、みんなで愛 し合う、そういう小さな行動を積み上げていけば大企業や 政府に打ち勝つことができる、こんな素晴らしい戦い方は ないのではないのでしょうか。

## Shumei海外支援PHOTOレポート



# ザンビア

Zambia

2004年から始まったザンビア・プロジェクトでは、現在 6,000名の農家が秀明自然農法に取り組んでいます。当初、ムババラ地区で始まったプロジェクトも現在は、ペンバ地区、チカンタ地区の3地区に広がり、さらに隣国のガンビア、マラウイにも広がっています。

2015年8月、ペンバ地区に幼稚園を創設。毎年教室を増設し、2023年には初等教育の学校が完成の予定です。教育の中に自然農法を取り入れ、彼らが育った環境・文化を学び、誇りを持ってこの地域のリーダーとなってゆく青年たちに育ってほしいと願います。子どもたちの制服は彼らの母親たちが裁縫を習いながら製作し、その技術を生かして収入の糧とするとともに、他の農民たちにも技術を伝えていっています。また日々の食事が十分でない家庭のために学校の隣接した土地を開墾しました。その農園の自然農法トウモロコシを給食の材料に使いたいと考えています。

またムババラ地区では Shumei が提供したレンガ作りの機械を使って、自然農法の研修や青年のための職業訓練施設を建設中です。





新しい制服を身にまとう子どもたち



SDGs (持続可能な開発目標) を掲げる農民たち





園で採れたトウモロコシ



15

数室で

14

縫製の先生



サンバレス州ボトーランの農民たち

# フィリピン Philippines

2006年、サンバレス州ボトーランで水田農家中心に自然 農法が始まりました。現在は9つの地区で、畑や果樹(バナナ、 マンゴー、アボカドなど)の実施者や耕作面積が増えて います。台風の襲来が多いフィリピンでは、自然農法の稲は 自然災害への耐久性が強く、環境に即した持続可能な農業 であると認知が広がっています。

また 2013 年より、タナイ地方では現地の農家と提携し、 ロセルというハイビスカスを名産品として、さまざまな加工品 を作っています。ロセルフェスティバルを年に一回催し、地元 政府や観光局と提携し、地域活性化に取り組んでいます。

2016年より、国連開発計画 (UNDP) のプロジェクトとして 支援を頂き、ドマガット族という先住民地区にて、自然農法 を通じた環境保護による地域支援を行っています。

志を同じくする団体の方々ともネットワークを組んでいます。 また、フィリピン大学など国内の大学やアメリカの大学など から、環境心理学の学びの場として、多くの教育者、学生 たちが研修に来ています。





タナイファーム責任者 アントニオ・デカストロ夫妻



ドマガット族の住むダライタン地区で訪問者らと





農作業で使う水牛



自然農法プログラムを行うテンプルヒル・インターナショナル・スクール

17

### Shumei海外支援PHOTOレポート



# ブラジル

世界でも有数のコーヒー生産国のブラジルでは、2006年、 ジャカランダ有機コーヒー農場とパートナーシップを組みま した。現在、元からあった古いコーヒー樹から新しい自然 農法の苗に切り替えています。そのため生産量に限りがあり、 現在は滋賀県の美術館「MIHO MUSEUM」内のレストラン・ 喫茶のみに提供しています。広く飲んでいただくためにも今 後、増産が望まれます。また2013年にはスウェーデンにて 行われたアグロエコロジー会議をきっかけに、ブラジルの別 のコーヒー小農家とのつながりもでき、そこでも秀明自然農 法でのコーヒー栽培が始まりました。

2009年、アマゾン地域でカカオと胡椒栽培を手がける フランシスコ・ワタル・坂口さんと出会いました。90年前、 多くの日本人農家がこの地に移住し、多くの苦難を乗り越え 確立した「アグロフォレストリー農業」を坂口さんは行っていま した。それは人間が収穫したい作物と自然の営みを融合 させた画期的な農法です。現在、坂口さんはそこに秀明 自然農法の理念を取り入れ、カカオと胡椒を Shumei に 提供しています。







Nepal



# ネパール

2012年、ネパール東部カンドバリにある、スルヤ・ボーディン グスクールの教師2名がアメリカ、クレストンにある秀明国際 交流センターで自然農法研修を受けました。彼らが帰国して 5年、現在は学校教育の場で自然農法が取り入れられて います。学校の農場は非常に硬い粘土質の土壌で、乾季は 耕すのも困難な状況ですが、2017年はハバネロとオクラが 豊作で、自家採種もできるようになってきました。

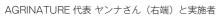
またその地域で Shumei の理念に賛同した農家が自然農法 を実施し、稲作は4年目となりました。昨年は天候の影響 (充分な降雨がなかった)もあり、前年と比較すると収量が 減りましたが、自然農法の理念に意義を感じている農民は、 減収となっても自然農法に取り組んでいく心意気です。今後は 天候にかかわらず、安定した収穫が得られるような栽培 技術の向上にも取り組んでいきます。





### Shumei海外支援PHOTOレポート





# マダガスカル Madagascar

2013 年、Shumei はマダガスカルの貧しい農民のサポートを する現地アソシエーション「AGRINATURE(アグリナチュール) 創立時から、アソシエーションと共同で自然農法の普及、支援 活動を始めました。現在、首都アンタナナリボ周辺の村で、 野菜栽培を中心にサポートしています。自然農法の実践 普及によって、現地の自然環境を守ると共に、アソシエーション がマルシェを設け、自然農法を実践する農民たちの野菜が、 首都の消費者たちに販売されるようになりました。近隣の学校 からも、給食を賄うための菜園を作るよう要請を受けてい ます。

またアソシエーションはマダガスカル北東部のサンババに おいて、自然農法のバニラの生産をサポートしています。また、 チョコレート会社「ロベール」とのコラボレーションで、自 然農法チョコレートの生産も始まりました。カカオも砂糖も 全てマダガスカル産で、Shunei が購入、日本に出荷され その利益が全て地元の人に還元されています。現在、この バニラとチョコレートは MIHO MUSEUM で使用されて います。







# タンザニア

タンザニアとケニアの国境近くのアルーシャに、「さくら女 子中学校」が2016年1月に開校しました。この学校は慶 応義塾大学名誉教授の岩男壽美子先生が中心となり日本の ODA (政府開発援助) や企業の支援によって建設されました。

学校での農業プログラムのスタートにあたり、2016年7月、 自然農法の支援を行いました。秀明自然農法ネットワーク から酒井賢治が担当し、MIHO 美学院中等教育学校の学生 が同行しました。朝晩の冷え込み、日中の強烈な日差しと 過酷な環境ではありましたが、圃場やガーデン、鶏小屋が できました。さくら中学校の学生たちは今では教育の一環と して自然農法に取り組み、肥料や農薬を使わないで野菜が できることや鶏や作物のお世話を通して心の教育が実現し、 学校の食事は自然農法の野菜を使っておいしく食べている そうです。野菜の成長とともに子どもたちの成長も大変うれ しく思います。今後も継続して支援を行っていきます。



21



圃場の野菜をお世話

# ももだに オーガニックマルシェ

2017 10/7[sat] -8[sun]

秋の行楽シーズンとなる三連休を利用し、 MIHO MUSEUM の玄関口「田代高原の郷」にて2回目となる オーガニックマルシェを開催いたしました。

信楽の美しい山々に囲まれた土地で「いのちの多様性を 育む自然とともに暮らす人が集い その心を世界へ そして未来へつなげていく」ことを目的に、本年は、会場横 を流れる桃谷川から「ももだにオーガニックマルシェ」と 名称を改めて実施しました。初日は雨模様でのスタートと なりましたが、開幕と同時に天気は回復し、2日間で約1,200 名が来場されました。昨年と比べ、秀明自然農法をご存じ ない方が多くご来場されました。

秀明自然農法に携わる方々をはじめ、マルシェの主旨に 賛同された30店舗が出店。「安全で体に優しく おいしい 食べもの」を中心として、地元信楽の特産品や雑貨なども 販売されました。また滋賀県草津市を中心に活動している 和太鼓「湖響」のジュニアチームと、太鼓を学ぶ地元信楽 の青年の演奏が催しに華を添えました。

会場中央の研修室では、主催・後援団体のブースを設け、 秀明自然農法ネットワーク (SNN) は、会場近隣の秀明 自然農法の田んぼで見つかった生き物たちの展示、MIHO MUSEUMは子どもたちへの美術ワークショップ、秀明 インターナショナルは支援をしている開発途上国 (ブラジル やネパール)のグッズ販売を行いました。また多様な種を

今回あらたな取り組みとして、秀明自然農法圃場の稲 刈り体験を実施し、ご家族で楽しんでいただきました。 また、ゴミを出さない(ゴミゼロ)イベントを目指し、使い 捨て容器でなくリユース食器での食事提供を行いました。 出店者・参加者にご協力を頂き、ゴミは2日間でゴミ袋 1つという驚きの結果となりました。今後も新しい郊外 型マルシェとして継続していきたいと考えております。 次回の開催をお楽しみに。

用いて制作された美しいアート作品も展示されました。



ももだにオーガニックマルシェ









田んぼに住んでいる生き物に触れるコーナー



地元信楽のゆるキャラ「ぼんぼこちゃん」





MIHO MUSEUMスタッフによる ワークショップ

隣接する田んぼにて稲刈り体験



化学物質や遺伝子組み換え食品を 使わない加工品



開発途上国支援のグッズ販売(ブラジル・ネパール他)



地元高校生によるレストラン

### ●ご来場者の声●

太鼓が良かった

たまたま通りかかりました 環境・オーガニックに配慮した 取り組みは素晴らしい

長く続けて、安心安全な食べ物を 多くの人に伝えてください

もっと頻繁に開催してください 楽しみにしてます!



#### リユース食器での食事提供にご協力を頂きました!

マイ食器持参でない方にはデポジット (前金)100円を頂いて貸出。 使用後に古布できれいにしてから返却すると50円キャッシュ

書面アンケートでは85%の方が「環境に配慮して良い」という 回答でした。

### ももだにオーガニックマルシェ 出店舗一覧

- じんさんの手づくり燻製
- 紡生(つむぎ)
- Kim'n curry
- Organic & natural store aina
- 松井養蜂園
- Arpita 工房+ CAFÉ
- ・日の出マフィン
- ●幸せの黄金鯛焼き
- Angelo-café
- ●紫香楽自然愛好会
- ・ベストハウスネクスト

- TAKEUCHI おいしい&野菜料理研究所
- ●澤善
- ●創空
- 天然石 Un Passo
- ・くずの里
- 秀明ナチュラルファーム
- ・大和茶グループ
- ・大槌町きらり店
- 陸ノマル井パン
- 秀明自然農法ヤングファーマーズ

- ・沖縄風食堂たんぽぽ
- ●漬物本舗道長
- ●山本農園
- ボン リジェール
- ・ファミリーファーマー
- ・味の学び舎
- ・かど脇
- MIHO MUSEUM
- ●田代地区

(順不同)

#### ももだにマルシェの販売基準(目安)

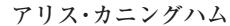
- ●農薬・化学肥料の使用不可/遺伝子組み換え作物は不可
- ●添加物・調味料は人工甘味料や着色料など化学物質を使用していないもの
- ●有害物質を含まない自然な素材であり、環境に負荷をかけないもの



2017年11月9~11日IFOAM (国際有機農業運動連盟) の第19回世界会議がインドにて開催されました。この会議は3年に1度開かれ、世界約120ヵ国、約800のIFOAM 加盟団体の代表や、各国の農業関係者が集まります。その中で秀明インターナショナル国連担当理事のアリス・カニングハムが基調講演者の一人として招待を受け、講演しました。

講演では自然順応・自然尊重のライフスタイルとしての自然農法について発表しました。有機農業に従事している人たちの中でも欧米では「自然をコントロールする」という考えも少なくないのですが、日本と同じように「自然を敬う」文化が息づいたインドでこのような講演ができ、会場の参加者や他の講演者からも共感を得られたスピーチとなりました。

## 自然農法から学ぶ ライフスタイル



Alice Cunningham

(秀明インターナショナル 国連担当理事)



### 自然を敬う農法

インドや日本では自然を聖なるものとして敬い、人々は自然とのつながりを大切にしてきました。しかし、現代社会において、この自然とのつながりは失われてきています。

産業型農業における大量の農薬や化学肥料投入は土壌 劣化を招き、作物にも悪影響を及ぼしています。また その 危険性が問われながらも、自然の恵みである種への遺伝子 操作が進められています。

自然農法の基本理念は自然順応、自然尊重です。自然との調和を重視することで、農業への取り組み方、そして日々の生活のあり方に対する考え方が変わります。自然農法は単なる農法ではなく、その理念を理解することで私たちが進むべき生き方を示していると思います。

私は日本で育ちましたので自然との調和というコンセプトは理解していましたが、実際にその理念を日々の生活に取り入れることがどういうことかというのは、自然農法の実施者の方々の圃場に出向き、共に時間を過ごすまで理解していなかったと思います。

自然農法を理解するとき、自然は完璧であることが分かります。自然界の法則を理解するとき、農業に対する考え方、アプローチが変わってきます。そして実施者の思いを理解した

とき、私自身の日々の生活に対する考え方、行動が変わって きます。

#### 自然は全てつながっている

何年か前に日本の瀬戸内海にある黄島という島を訪れたときのことです。自然農法の実施者は島で自然農法を始めたとき、少しでも多くの圃場面積を確保しようと多くの木を伐採しました。圃場面積が広ければ広いほど多くの作物を採れると思ったからです。

おそらく多くの農家はこの考えのもと、耕作地を確保していると思います。しかししばらくして、島の生態系に異変が起こりました。木々や植物の健康状態が悪化しただけでなく、海産物など海の生態系にも影響が出たのです。圃場における作物の収穫量も落ち込みました。大量の木を伐採したため、島全体の生態系のバランスが崩れたのです。目の前の圃場だけに注目し、山や海や周りの自然は全てつながっているという根本を見失ったためでした。自然界は全てつながっているという根本を見失ったためでした。自然界は全てつながっており、どこか一つを害すれば、必ず他にも影響するのです。このことに気が付いた実施者は島の生態系に合った植林をし、圃場と森のバランスを保つことで、収穫量を増やすことができたのです。



黄島の圃場

私たち一人ひとりがこのバランスを理解し、私たちの一つひとつの行動が周りに与える影響を考慮すれば、自然環境は大幅に改善できます。私たちが起こす行動が遠く離れた地域にまで影響を与えるということを理解すれば、安易に環境を害するような行動はできないはずです。農薬の流出によって河川が汚染され、その地域に生息する生物に影響を与え、やがては海にも影響が出ます。今、世界中の海でデッドゾーンと呼ばれる何も生息しないエリアが多く発見されていることをニュースで聞いた方も多いと思います。私たちが何げなく廃棄しているものが、環境にどのような影響を与えているかということを理解すれば、日々の行動に対する責任感が湧くはずです。

自分の家の周りだけ、もしくは自分の街だけ、国だけという観点で物事を進めるのではなく、地球全体という観点で行動できれば、自然環境だけでなく、人間関係、社会全体が調和の取れたものに変わることができるはずです。自然農法の実施者たちは皆、自分たちが育てる作物を生態系の一部として、その成長過程における周りへの影響を最小限に留めています。自然のリズム、関連性を壊さないように心掛けているのです。彼らにとって圃場はたとえどんなに小規模であっても全ての生命体が影響しあって形成されている小宇宙なのです。

### 自然を観察することで 解決策が見えてくる

土壌ももちろん、多くの微生物が影響し合って健全なバランスを保っています。そこに道路やダム、建物などが建設されれば、空気の流れや水の流れなど、全体の循環システムに影響が出てきます。その結果、土壌の健全な状態が悪化するのです。自然を観察し、自然の声に耳を傾ければ、自然が解決策を提示してくれます。

自然を観察することで、虫に対する考え方も変わります。 自然農法において害虫は存在しません。なぜなら、全ての 生物にはそれぞれに課せられた役目があるからです。自然 界に過不足はありません。自然は本来完璧で多すぎるとか 少なすぎるとかはあり得ないのです。虫の大量発生は自然 界のバランスが崩れたことによって起きるのです。ですから、 何がバランスを崩しているのかを解明し、対処すれば害虫 被害は防げます。もちろん、自分の圃場以外に原因があり、 簡単には対処できないかもしれません。それでも土壌が豊か で、作物が健康であれば、害虫被害を最小限に抑えられます。 殺虫剤などで害虫を駆除したとしても、その影響は必ずどこ か他の部分に現れます。その場しのぎの解決策は一時的で、 結果的に弊害をより大きくしてしまうことは往々にしてあり



会場のインディア・エキスポ・センター

ます。問題の根本に目を向けることが大事なのです。これは 人間社会においても同じです。

### 清らかな土と種が 清らかな食べ物をつくる

自然界では多様な生物が調和を保って生息しています。 圃場においても同じことが言えます。豊かな土壌は清らかで、 多様な微生物が生息し、作物に必要な栄養素を十分に保持 しています。ですから肥料などを加える必要は一切ありませ ん。農薬なども必要ありません。人為的に投入されたもの は有益な微生物を死滅させ、土壌の力を弱めてしまいます。 肥料などを投入されていない圃場の作物は長い根を持ち、 必要な栄養素を土壌から吸収できるのです。土壌が健全で あれば、健全な作物を十分収穫できます。

種が清らかであることも必須です。種は生命の根源であり、在来種は私たちの貴重な財産です。この貴重な財産を守るべく、自然農法では自家採種を推奨しています。ところが近年世界中で自家採種をする農家は減少しています。その結果、多くの在来品種が失われてきています。何世代も自家採種された種はその土地の風土に適応し、天災などにも耐えられる力を持っています。また、これらの在来種はその

土地独特の食文化を支えています。多様な品種の在来作物 を守ることでそれぞれの土地の文化を豊かにすることができ るのです。

産業型農業は収量と収益を確保するために社会や環境の 健全化を犠牲にしています。世界の食料産業はグローバル 化の名の下、低価格や利便性を重視し、環境汚染や健康被 害を軽視していると言えます。多くの消費者も安い食べ物を 望みますが、産業型農業によって生産された作物は本当に 安いのでしょうか? 産業型農業による弊害として起こる 土壌劣化、水質汚染、空気汚染、健康被害等を実質的に かかるコストとして計算した場合、本当の価格は決して安く はありません。食べ物の値段として支払う金額は安いかも しれませんが、環境汚染改善のための費用や健康被害の ための医療費など、見えないところで多額の費用が私たちに 課せられるのです。環境に優しい、持続可能な生産と消費を 心掛けない限り、状況は悪化する一方です。本当に価値 ある食べ物は清らかで栄養素が豊富な食べ物のはずです。

### 私たちに求められる意識改革

そのためにも私たちにとって大切な食文化に対する意識を 高めなければなりません。



食べ物がどのような生産者によってどのように生産されているのかということに関心を持たなければなりません。生物 多様性を守り、自家採種を行う小規模農家のサポートをしなければ、私たちの食文化そのものが脅かされます。

生産者は芸術家と言えます。音楽家や画家が私たちには 聞き取れない音や見分けられない色を認識できるように、農 家は自然のリズムを理解し、自然の一部としてそのメッセー ジを受け取ることができます。自然農法の実施者は自然と の調和の中に美を見出します。本当に美しい環境に触れると 人の心も清まります。この美による感化こそが私たちの魂を 向上させ、本当の意味での豊かさを与えてくれます。多様性 が織りなす豊かさは美しい芸術です。本当に美しいものを求 めれば、清らかな土と種からできる作物の生命力・エネルギー を感じ取れるでしょう。美しいものを求めることは調和を求 めることです。

産業型農業が作物や土壌に与える弊害を科学的に数字で示すことは可能かもしれません。しかし一つひとつの生命体が持つ生命力に与える影響を測ることはできません。

産業型農業がどれだけ健康被害を与えているかは数値化できるかもしれません。しかし精神的影響は測れません。 私たちの知性、感情、魂への影響などを推し量ることはできないのです。自然界は複雑に絡み合ったシステムで、私た ちはその一部です。人間を自然から切り離すことはできません。だからこそ、自然の法則を理解し、自然から学ぶことで、 自然との調和を保ち、健全な社会を築くことができます。自 然への感謝、敬意が大切なのです。

シューマッハ・カレッジの創設者のサティシュ・クマール氏は、「自然を所有するという考え方から自然との関係を築く 考え方にシフトしなければならない」と訴えています。「所有」 から「関係を築くこと」へと変わることで聖なるものへの 理解が生まれるのです。

自然から学ぶ姿勢を持ち、自然との調和を意識した生活を送ることで、持続可能で健全な社会や環境を築くことができるのです。自然順応、自然尊重の理念を日々の生活に取り入れることで、豊かな社会づくりに貢献できると思います。私たち一人ひとりの意識改革が求められています。私たちは自然の一部であることを認識し、自然と調和し、自然の法則に準じた生活を営むべきです。

最後に、自然農法の提唱者である岡田茂吉師の言葉で 締めくくりたいと思います。この言葉に全てが集約されて いるのではないでしょうか。

『すべては自然が教えている』